

年間第四主日

2011.1.30

マタイ 5・1-12a

先週の日曜日の福音では、イエスの公の活動の開始と、ガリラヤの湖の漁師であった最初の弟子たちのいわゆる召し出しの経緯が語られていました。漁師の彼らが、魚を獲ったり、網の手入れをしているところに通りかかったイエスに呼びかけられて、彼らは舟や網を捨てて、イエスのみ後につき従う弟子となったのです。マタイ福音書ではこのことが、天の国の福音を宣伝え始めたイエスが最初になさったこととして語られています。今年の年間主日のミサではマタイ福音書に記されている順番に従って、イエスと弟子たちが歩んだエルサレムへの旅の道をたどります。私たちもあの最初の弟子たちのように、イエスのみ後に着いて、イエスの語られるみことばに耳を傾け、イエスが人々の中でなさってくださったみわざの意味を受け止めて行きたいと思えます。

今日聴いた福音は、マタイ福音書の5章から7章に収められている一連の山上の説教のはじめに語られているイエスのみことばです。マタイ福音書の順番に従うなら、今日の福音のみことばは、「悔い改めよ。天の国は近づいた。」という先週聴いた、福音宣教開始の宣言に続く、イエスの最初の私たちへのメッセージです。イエスが行われる奇跡のみわざの評判を聴きつけて、イエスのもとに押し寄せてきた大勢の人々に交じって、イエスについて来た弟子たちも、イエスのお側近くに集ってイエスが語られるおことばを聴いています。私たちもその弟子たちのように、心新たにイエスが語られる今日の福音に耳を傾けたいと思えます。

「心の貧しい人々は幸いである。天の国はその人たちのものである。」と始まるこの山上の説教の中で、イエスは「幸い」という言葉を八回も繰り返し告げられます。イエスがここで告げられる「幸い」こそ、「悔い改めよ、天の国は近づいた。」という、イエスの福音が指し示す「幸い」です。福音という言葉は、幸いのメッセージという意味だとどこかで聞いたはずですが、イエスはここで、その天の国の幸いのメッセージを語り聞かせてくださいます。それにしても、イエスの語られる「幸い」は、私たちが幸いという言葉で思い浮べることとは、なんとかけ離れているように思えることでしょうか。これが、イエスが告げる福音・幸いのメッセージだと、マタイ福音書は今日私たちが聴いたおことばをイエスの福音の中の最初に置いているのです。イエスが告げられる「幸い」のメッセージが、私たちにかけ離れたものと聞こえるのは、それが、イエスによってもたらされる「天の国の幸い」だからです。イエスは弟子たちを、そして私たちをこのような天の

国の幸いに招こうとして、この幸いのメッセージ・福音を告げておられるのです。イエスが福音を告げ知らせ始める最初に求めておられた「悔い改めよ」という呼びかけは、私たちの心の中にある、いわゆる幸せ願望の方向を改め、イエスによってもたらされる幸せに向かって、方向転換するようにとの呼びかけなのです。そのことが出来るためには、私たちの心をイエスと、イエスが指し示しておられる「天の国」、すなわち、イエスが私たちの父としてお示しくださった神に向かって、イエスがそうされたように、私たちの心の目を上げて行かなければなりません。「天の国」は私たち全て者の父である神がいてくださるところに広がっているからです。

イエスが幸いだと呼びかけてくださる「心の貧しい人々」とは、神の御前に心貧しくある人々です。神の御前に心貧しくあるということは、神の御前に頭を下げることを知っているということです。神の御前における自分の貧しさを根本的に知っているということです。神のみ前においては誰も、自分自身を誇ることは出来ません。自分の我を通すことは出来ません。最終的には、私たちの営みの全てを神におゆだねすることしか出来ません。その都度の自分の思いを捨てて、全てを神のみ手のはからいに委ねて、神の子として生きることを選び取る生き方が、イエスが言われる心貧しい者たちの生き方です。

悲しむ人々は幸いとイエスは言われます。悲しむ人々とは、この世の悲しみを知っている人々のことです。何故その人々が幸いだとイエスは言われるのでしょうか。この世の悲しみを知った人々は、父なる神がご覧になっているこの世の真の姿を、身をもって体験したからです。そのような体験なしに、私たちはイエスによってもたらされた天の国の幸いへの憧れを持つことは出来ないからです。救いへの希望を持つことが出来ないからです。

柔和な人とは、神のみ旨に対する柔和さです。自分の思いを捨てて、全てを父なる神のみ旨として受け入れることができる人だけが、ともに生きる人々に対しても柔和であり続けることが出来るのです。自分たちの正義を振りかざして、他の人々を裁くのではなく、柔和な、しかし不屈の心をもって、神のみが実現してくださることの出来る、真の正義と平和の世界を自分の身を賭して求め続ける努力が、天の国の幸いへの道を開くのです。

平和を実現するためには、私たちの正義を求める心が、立場の違うお互いへの憐れみに満ちた配慮と結ばれていなければなりません。正義も平和も、私たちがそれを一方的に主張しあうことによっては、決して実現されるものではなく、むしろ、そうすることによって、私たちの間の混乱はますます解決不可能になっている現実を私たちは知っているはずで

イエスがそのように生きられたように、この世に神の義の実現を求めて生き

ようとするとき、周囲からの迫害を経験するとすれば、それは、たまたまそのような迫害が起こったということではないのです。イエスの十字架が示すように、今日聴いたイエスの天の国の幸いへの招きに応えて生きようとするなら、私たちもまたこの世における迫害の苦しみを経験することを覚悟しなければなりません。なぜなら、イエスが呼びかけておられる天の国の幸い、父なる神が与えてくださる幸いは、私たちがこの世にあって追い求めている、自分一個の幸せへの幻想を粉碎せずにはおかないからです。自分の内側からも、自分の外からも経験するであろうこのような迫害にも似た苦しみの中で、十字架の待つエルサレムを目指して歩むイエスの招きを受け、それに応えることが出来るなら、私たちも、私たちの人生の中で心の清さを味わうことが出来ることでしょう。「心の清い人々は幸いである。」と言われるイエスの言葉の意味を悟り、イエスが味わっておられる、父なる神を見ることの幸いを味わうことが出来ることでしょう。

今日の福音に響くイエスの呼びかけは、十字架の道を行くイエスが味わっておられる幸いへの招きです。最初の弟子たちを御自分の幸いへと招かれたイエスは、私たちをもその幸いへと招こうとしていてくださるのです。弟子たちにとってもイエスのみことばは最初に聞いただけでは、全て理解出来ることではなかったことでしょう。イエスのみ後に着いて、イエスとともに歩む道程の中で、弟子たちはイエスのこの最初の招きがどれほどの恵みであるかに、少しずつ気づかせていただけたに違いありません。私たちもそのような恵みの悟りを求めて、年間主日の福音に導かれて、イエスとともに歩む信仰生活の歩みを続けたいと思います。

カトリック高円寺教会  
主任司祭 吉池好高